

七つ紋附

まあちやん記

『アラまあ何て好い柄、一寸御母さん御覽なさいな、まあちやんの何かに好いちやありませんか。』

美彌姉さんは何時でも立派な柄さへ見ればかう仰有つて

『ね、買つておやんなさいよ御母さん。こんな好い柄めつたにありやしない事よ、ね、』

買つておやんなさいよ。』

つて、それはく好い姉さん。

而して御母さんが、だつて

も何に好い柄なんだらうね、

したつて、長袖神にだつて好い柄、長袖神にしみたとお思ひならね、とてらを作つておやんなさいな、綿をどつさり入れて、一寸と朝だの夜だの引かけさせると、どんなに温くつて可愛らしいか知れやしません、ね後生だから買つてやつて頂戴な。』
おしまひには御自分のものかなんどのやうにおねだりなさいませぬの。

『又美彌さんのカウカウが初まつた、まるで鳥の化物みたいだねえまあちやん。』

斯う云つて御母さんはお笑ひなされる。そして買つて下さる事もあるし、今月はもうお帳面がしまつたから、もうどうしても不可ませんと強い事を仰有つて、買つて下さらない事もある。けどもそんな時、私は口惜しくつて、あんなに美彌姉さんが親切に仰有つて下さるのに、意地の悪い御母さんだと、勿體ないけれど憎らしくなりますの。

『嫌だわ私、あんな好い柄、ねえ姉さん。』

『そいちやね、御母さん、私買つてやつて可い事？』

此間〇〇雑誌で頂いた彼の賞金でねえ、御母さん、よくつて？』
姉さんは、私かべそをかき相にしてるもんだから、

いぢやないか、なんて仰有ると、定つて、
『否、何にでもなるわ、お被布にしたつて、着物に



姉さんのお金をつかはしては悪いと思つて、
『だつて姉さん、そいちや姉さんが御本をお買ひな

さるんでせう、そのお金がなくなつちまふわ。』

『可いのよまあちやん、ねえお母さん買つてやつて

よくつて？』

『ホ、美彌姉さんは本當にまあちやんには目がないんだよ、何だつて惜しいものなしたね。』

『だつてあんな好い柄なんですもの、何て好い柄で

せう。』

『全く好いには好いね、そいちやまあ、美彌姉さん

に買つて頂きなさい、其代り御母さんから美彌姉さん

に御本を買つてあげる事にしませうねえ。』

『アラ、どうも有り難う！』

美彌姉さんと二人で御禮を云つて、まあちやんほど

んなに澤山好いお着物を買つて頂いたか知れやしません。

その又柄の美しい事、美彌姉さんに見立て、頂いたのに、悪いのがあつたためしはありません、よそへ着て出ますと、

『まあ何て好い柄、何處でお買ひ遊ばして？』

きまつて斯様皆様から訊かれますの。
だから私嬉れしくつて嬉れしくつて。
『今年のお節旬には母様が御紋附を染めて下さるんですつて、だから美彌姉さんに御相談して色をきめると好いつて仰有るのよ。』

私何色にしやうかしら、

褪紅色？あんまり赤つぼくて派出過ぎるわ屹度。

紫？黒？もつと何か好い色があるに違ひない、

美彌姉さんは何が好いつて仰有るだらう？

何時だつたか美彌姉さんのお小袖を拜見したら、

私の家の定紋はつたのに、ハートみたいなのをつた一つ丈けお脊中のところへつけてあつたわ、而して私が、

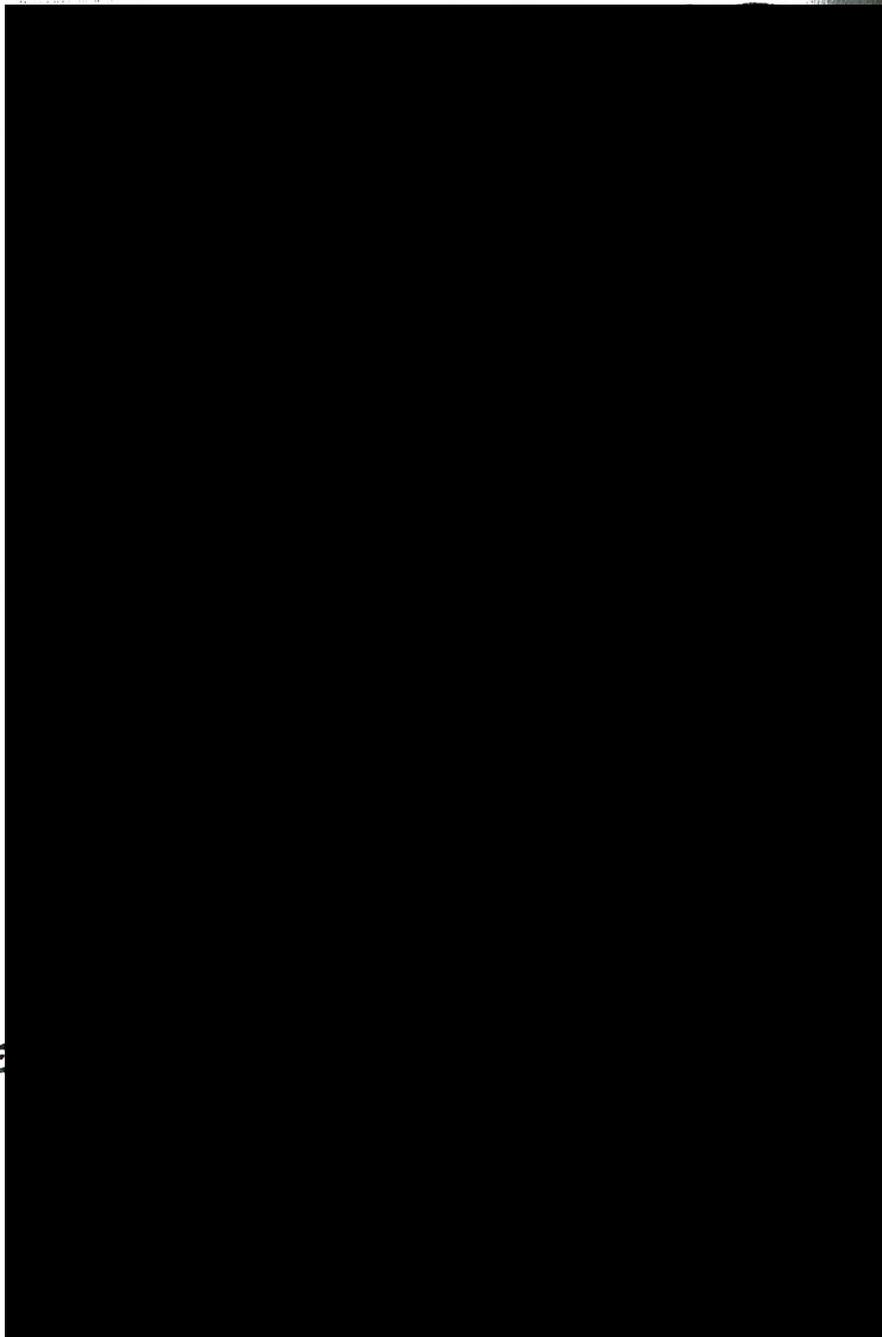
『アラまあ姉さん、随分だわね、ハートの御紋なんかつけて、何てハイカラでせう。』

つて笑ひますと、

『嫌なまあちやん、ハートと違つてよ、これね、か

げづたつてのよ、矢張りお家の定紋と同じ事なんですよ。』

つて仰有つたわけ。



ot

すもの、而して矢張り美彌姉さんのみたいになつたけにしやうかしら、だけども同じつけるのなら澤山の方が好いわ。美彌姉さんのお振袖だつて、まだ外の御紋附だつて脊中の處に一つ丈けぢやない、お袖の後だのお胸の所だの、随分きれいだつたわ。

だから私も出来る丈け澤山の御紋にして勅題の雪を裾模様染めて頂かう。

美彌姉さんは何て仰有るか、姉さんの去年の御紋附

はたしか五つ紋だつたでせう、だから今度は二人で

七つ紋にして、ハートのやうなハイカラな彼のかげ

づたをお揃ひにつけませう。

(完)